

## [報告] 大阪・四天王寺,安政南海地震津波碑文の判読

長尾 武\*

The Reading of the Inscription on the Ansei Nankai Earthquake Tsunami Memorial  
at Shitennoji Temple, Osaka

Takeshi NAGAO

Tennojicho minami 3-8-9, Abenoku, Osaka, 545-0002 Japan

In Osaka, a stone memorial for the victims of the Ansei Nankai earthquake tsunami can be seen at Shitennoji Temple. This paper presents an improved reading of the inscription on the memorial. My research is based on a visit to Shitennoji Temple, and incorporates comparisons of three previous readings of the inscription, i.e., Nagao (2011), “Jishin Kaiituko” from “Shinshu Nihon Jishin Shiryo” [Earthquake Research Institute of Univ. of Tokyo (1987)], and “Jishin Kaiitsuki”, which is the original of “Jishin Kaiitsuki”. “Jishin Kaiitsuki” is without question an exact copy of some other document, because it includes several simple misreadings of characters, which wouldn’t have happened if the transcriber had actually visited the memorial. The editor of “Shinshu Nihon Jishin Shiryo” copied this transcription, including its errors. The inscription includes information and instructions for future generations about earthquakes and tsunamis. It says that the sea was rumbling and the tidal pattern had changed the day before the tsunami hit Osaka. We cannot find any documents that report these phenomena in Osaka the day before the Ansei Nankai earthquake. The events described in the inscription may have been caused by the Ansei Tokai earthquake which occurred on the same day. The memorial is among the stacked, forgotten graves and has gradually been forgotten by the people of Osaka. We hope that the lessons of the inscription can be utilized for disaster prevention.

Keywords : Historical Earthquake, Ansei Nankai Earthquake Tsunami, Stone Memorial, Shitennoji Temple.

### §1. はじめに

大阪の代表的な古刹として名高い四天王寺に安政南海地震津波の犠牲者供養石碑がある。筆者が四天王寺に安政南海地震津波石碑があるのを知ったのは、政野(1999)が紹介した、大阪市鶴見区放出・芳崎力氏所蔵『記録帳』の記述を読んだことによる。「(大地震・津波の惨状は)筆紙に尽し難く恐敷事に候其追善之為天王寺元三大師前に石塔建立之事」とある。政野氏は四天王寺で調査したが、該当の石碑を発見できなかつたと記述している。大阪の歴史書や郷土史関係の著作に、これについての記述は見られない。四天王寺にお尋ねしたが、その石碑の存在をご存じなく、記録された文書も無いということであった。

筆者は2010年春、四天王寺の元三大師堂の門前の広場、門に向かって左手(西側)、七段に積み上げられた無縁墓の最上段中央に安政南海地震津波の犠

牲者を供養する石碑を確認した(写真1)。碑文の保存状態が良く、約150年前の、容易に近づいて読むことの出来ない場所にある碑文に拘わらず、比較的鮮明な状態で文字が確認でき、全文の意味を推測できる判読文を作成することができた。

大阪は過去において南海地震によって大きな被害を受けてきたのであるが、それらの災害を記した石碑は実に少ない<sup>1)</sup>。すでに廃棄されたものもあるかもしれない。四天王寺の石碑は、このまま放置されるなら、忘れ去られてしまう可能性がある。この石碑には「海鳴潮の干満みだれし時は早く津波の兆と知りて難をのかれ玉ふへし」と、教訓が刻まれている。また、津波が襲った前日、十一月四日に大阪で海鳴、潮の干満の異常があったと記述した史料はこの石碑以外には見られない。とても重要な災害の記念碑と考えるのである。そのため、この石碑の存在とその判読文を日本地震学会の『地震』に史料紹介として発表した

\* 〒545-0002 大阪市阿倍野区天王寺町南3-8-9  
電子メール: nagaotakeshi345@hotmail.com

[長尾(2011)].

しかし、その後、『新収日本地震史料』[東京大学地震研究所(1987)]に所収の『地震海溢考』に当該石碑についての記述があることに気付き、『地震』編集部に報告した。後日、このことが『地震』誌上にも掲載された(『地震』編集委員会, 2012)。現在、四天王寺にある供養石碑には、他の石碑に隠されて一部判読できない部分があるが[長尾(2011)], 『新収日本地震史料』には、他の墓石に隠されていた部分が記載されている。しかし、石碑を訪れて碑文を見れば簡単に判読できる文字で誤りや脱字がある。また、編集者の文言の加筆も文中に数カ所挿入されている。『新収日本地震史料』は、四天王寺の碑文を判読して記載したのではなく、慶応義塾大学三田メディアセンター所蔵の『地震海溢記』(『地震海溢考』としては登録されていない)を翻刻した史料である。誤字や編集者の文言もそのまま転記されたと考えられる。

本研究の目的は、四天王寺の碑文のより正確な判読文を示すことである。そのために、まず、過去に行われた碑文の三つの記録を紹介する。第1に『地震』に掲載された碑文の判読文[長尾(2011)], 第2に『地震海溢記』に所収の碑文記録、第3に『新収日本地震史料』[東京大学地震研究所(1987)]に記載されている碑文記録である。

次に、2012年春、四天王寺の碑文を改めて判読し、碑文の三つの記録中の誤字を指摘して、より正確な碑文の判読文を示した<sup>2</sup>。

- 1 大阪市には、四天王寺の石碑以外に、浪速区幸町3丁目、大正橋東詰北側に『大地震両川口津浪記石碑』、生野区舍利寺1丁目、舍利尊勝寺の門前に『地震津波横死者の供養石碑』、此花区西島5丁目、新淀川の堤防下に『常吉新田開発地主と海嘯溺死者の墓』がある[長尾(2012)]。
- 2 筆者が2012年4月に自費出版した『水都大阪を襲った津波(2012年改訂版)』[長尾(2012)]では、四天王寺の碑文について、『新収日本地震史料』を参照して修正した判読文を示したが、不十分であった。その後、『地震海溢記』を参照し、判読が一気に進んだ。この史料に記録されている碑文の崩し字は転写の際の間違いも数カ所あったが、石碑文の難読箇所を読み取るのに、大いに参考になった。また、石碑に近づいて読むことは困難であるが、写真を撮影した後、難読箇所を確かめることで、判読が容易となった。

## §2. 碑文の三つの記録

### 2.1 長尾(2011)の判読文

まず、初めに長尾(2011)を採り上げる。この論文は、石碑文を実際に見て判読したものである。他の墓石によって隠されて全文の判読は困難であるが、いろいろな角度から観察し、判読できた部分を表1のAに記した。1~8の数字は筆者が加えた石碑文の行番号である。

当時は、『新収日本地震史料』や『地震海溢記』の存在に気付いていなかった。そのため、他の墓石によって隠されて読めなかった4, 5行目の下部には、「(以下読めず)」と記した。

### 2.2 『地震海溢記』に記載の碑文記録

『新収日本地震史料』に所収されている『地震海溢考』の原史料である『地震海溢記』(慶応義塾大学三田メディアセンター所蔵)に記載の碑文記録を表1のBに示す。

長尾(2011)では、他の墓石に隠されて読めなかった部分が、この史料では記載されている。ただし、近世の崩し字(図1)で記録されており、筆者の判読文で示した行番号を付していない行は石碑文には無く、また、6の「后世」、7の「と云爾」も石碑文中に見られない。

### 2.3 『新収日本地震史料』に記載の碑文記録

『新収日本地震史料』に所収の『地震海溢考』に記載されている碑文を表1のCに記す。

これは『地震海溢記』(慶応義塾大学三田メディアセンター所蔵)に所収の碑文記録の翻刻であり、石碑文を実際に見て判読したものではない。石碑文には無い行や文言が『地震海溢記』と同様に記載されており、『地震海溢記』をそのまま転記したものである。ただし、1行目の「洪浪」を「洪水」としており、転写の際に生じた誤字と考えられる。また、5行目で「寔憐」を「是憐」としている。崩し字の判読を誤ったと思われる。

## §3. 三つの記録の比較と正しい判読

2012年春、四天王寺の石碑文を現地で改めて判読して、先に示した碑文の三つの記録の相違する箇所について、以下のように検討を行った(数字は筆者が加えた石碑文の行番号である。また、碑文の三つの記録の相違する文字の部分に下線を付した)。検討の結果、正しいと考える判読を表1のDに示した。

1について、長尾(2011)では「諸国地震及洪波」、『地震海溢記』では「諸国地震洪浪」、『新収日本地震史料』では「諸国地震洪水」と記載されている。石碑文では、「浪」であるか、「波」であるか、判断が難しい。写真2によれば、「浪」の方に近いと思われ、「地震及洪浪」と結論する。

4について、長尾(2011)では「四日五日の地震」、『新収日本地震史料』では「四日五日地震」、『地震海溢記』では、「四日五日地震」と記載されている。石碑文では、はっきり「四日五日の地震」と記されている(写真3)。

5について、長尾(2011)では「木津川口悉の」、『地震海溢記』では「木津川辺の」、『新収日本地震史料』では「木津川辺の」と記載されている。石碑文では、はっきり2字で「口悉」と記されている(写真3)。また、長尾(2011)では、「川上に押上り」、『地震海溢記』では「川上に押寄」、『新収日本地震史料』では「川上に押寄」と記載されている。石碑文では、「押寄」を崩し字で記している(写真4)。

6について、長尾(2011)では、「右」、『地震海溢記』では「尤」、『新収日本地震史料』では「尤」と記載されている。石碑文では「右」より「尤」に近い崩し字である(写真5)。また、長尾(2011)では、「愛憐むへし」、『地震海溢記』では「<sup>まことに</sup>寔憐むへし」、『新収日本地震史料』では「是憐むへし」と記載されている。石碑文は「寔」を崩し字で記している(写真6)。

8について、長尾(2011)では、「秋建之」、『地震海溢記』では「春建之」、『新収日本地震史料』では「春建之」と記載している。石碑文には「秋」と、はっきりと書かれている(写真7)。

碑文の三つの記録を石碑文と比較した結果、長尾(2011)では、4箇所(「洪浪」「押寄」「尤」「寔憐」)で誤字(「洪波」「押上り」「右」「愛憐」)があることがわかった。

『地震海溢記』は四天王寺の石碑文を記した別の史料から転写した史料と考えられる。石碑文を読めば、すぐに判読できる2箇所(「木津川口悉の」「秋建之」)で誤字(「辺」「春」)があり、2箇所の脱字(「及」「の」)があった。この史料の編集者は石碑文を直接判読していないことが明らかである。また、碑文には無い編集者の文言が挿入されていた。しかし、この史料が存在したことにより、石碑の難読箇所が容易に判読可能となり、長尾(2011)の4箇所の誤読を指摘することができた。

『新収日本地震史料』は『地震海溢記』の翻刻であ

ったが、『地震海溢記』の2箇所の誤字(「辺」「春」)をそのまま転記し、1箇所(「洪浪」)を「洪水」に誤記していた。また、『地震海溢記』は崩し字で書かれているため、1箇所(「寔憐」)で判読の誤り(「是憐」)があり、計4箇所に誤字があった。さらに、『地震海溢記』と同じ2箇所(「及」「の」)で脱字があった。編集者の文言もそのまま転記されていた。

#### §4. 口語訳

去年十一月四日・五日の地震から逃れるために、小船に乗った人々があった。突然、大波が湧き上がるように起こり、木津川口に碇泊していた大小多数の船が一時に川上に押し寄せ、橋を落とし、船を砕き、多くの人々が溺死した。

もっとも、津波が襲った前日から、海鳴、潮の干満の乱れがあったが、それに気付かず、死んでしまった人々はたいへん可哀想である。海鳴、潮の干満の乱れがあれば、早く津波の兆候であると気付いて、災いを避けてください。

大阪で十一月四日に海鳴、潮の干満の異常があったと記述した史料は他に見られない。四日に海鳴、潮の干満に乱れがあったとすると、その理由は、この日に東海地震が起こり、その影響によると考えられる[長尾(2011)]。

#### §5. おわりに

四天王寺にある安政南海地震津波の犠牲者供養石碑の碑文は、『新収日本地震史料』の『地震海溢考』に紹介されているが、慶応義塾大学三田メディアセンター所蔵の『地震海溢記』を翻刻したものであり、石碑文の判読は行っていないこと、また、原史料の『地震海溢記』についても、他の史料から転写されたものであり、この史料の編集者は石碑文を直接判読していないことも本調査から明らかとなった。しかし、この史料が存在したことにより、石碑の難読箇所が容易に判読可能となり、長尾(2011)の誤読箇所を指摘し、碑文のより正確な判読ができた。

本稿によって、碑文のより正しい判読文を示すことが出来たが、石碑は現在、無縁墓と一緒に積み上げられ、他の墓石に隠された部分については、『地震海溢記』、『新収日本地震史料』に記載の通りとした。

碑文は、「津波来襲前日の四日に、海鳴や潮の干満の異常があったが、これに気づかず、小船に避難していた多数の人々が溺死した。海鳴や潮の干満の異常があれば、津波の前兆と思って、災いを避けな

さい」と注意している。大阪市民に地震と津波による災害を思い出させ、防災意識を高めさせる貴重な文化遺産である。四天王寺の碑文に記された教訓を正しく判読して、先人の思いを人々に伝え、近い将来やって来るであろう地震・津波に対して備える必要がある。石碑の保存対策が行われ、防災教育に活用されることを願う。

### 謝辞

先ず初めに、『地震』掲載論文について、筆者の文献調査が不十分だったことにより、日本地震学会の皆様方に多大のご迷惑をおかけしましたことをお詫びいたします。

本稿を歴史地震研究会へ投稿するに当たって、編集長の金田平太郎氏から貴重な助言を賜りました。史料調査には慶応義塾大学三田メディアセンター、大阪市立天王寺図書館から援助を賜りました。英文について、Jonathan Brown 氏、Brendan Hurley 氏、Chie Hurley 氏、Robyn Smith 氏、Jeremy Larsen 氏から援助を賜りました。原稿の作成は放送大学大阪学習センターのパソコン室で行いました。職員、学生の皆様から援助を賜りました。尚、本稿を書くことが出来たのは、安政南海地震津波の犠牲者の供

養石碑が無縁墓中とはいえ、廃棄されることなく大切に保存されてきたことにあります。調査をさせていただいた四天王寺に対して深く御礼申し上げます。

### 文献

- 政野敦子, 1999, 安政大地震と津浪, あしたづ, 河内の郷土文化センター記念誌, 13-17.
- 長尾武, 2011, 安政南海地震津波(1854)の犠牲者供養石碑 - 四天王寺(大阪市)の無縁墓地調査より -, 地震 2, 63, 251-253.
- 長尾武, 2012, 水都大阪を襲った津波(2012 年改訂版), 自家版, 528 pp.
- 東京大学地震研究所, 1987, 新収日本地震史料第5巻別巻 5・2, 1512-1517.
- 『地震』編集委員会, 2012, 掲載論文についてのお知らせ, 地震 2, 64, 183.

### 史料

- 『地震海溢記』, 慶応義塾大学三田メディアセンター所蔵.

表1 四天王寺,安政南海地震石碑の判読文

Table 1 Various readings of the stone memorial of the Ansei Nankai earthquake tsunami at Shitennoji temple.

	A 長尾(2011)の判読文	B 『地震海溢記』に記載の 碑文記録	C 『新収日本地震史料』 の記述	D 正しいと考えられる 判読文
東 面 ・ 正 面	1. 諸国地震及洪波 2. 南無阿彌陀佛 3. 水陸横死大菩提	1. 諸国地震洪浪 2. 南無阿彌陀佛 3. 水陸横死大菩提 [右四天王寺石碑文] [高井田和尚筆]	1. 諸国地震洪水 2. 南無阿彌陀佛 3. 水陸横死大菩提 [右四天王寺石碑文] [高井田和尚筆]	1. 諸国地震及洪浪 2. 南無阿彌陀佛 3. 水陸横死大菩提
南 面	4. 去年霜月四日五日の地震を遁ん為に小船に乗居し輩(以下読めず) 5. 木津川口悉の大小数船一時に川上に押上り橋を落し(以下読めず) 6. 右前日より海鳴潮の干満乱しを志ら寿して死に至る者愛憐むへし	4. 去年霜月四日五日地震を遁ん為に小船に乗居し輩俄の洪浪湧か如く 5. 木津川辺の大小数船一時に川上に押寄橋を落し船を掻き、漂没死人夥し 6. 尤前日より海鳴潮の干満乱しをしらすして死に至る者寔憐むへし[后世]	4. 去年霜月四日五日地震を遁ん為に小船に乗居し輩俄の洪浪湧か如く 5. 木津川辺の大小数船一時に川上に押寄橋を落し船を掻き漂没死人夥し 6. 尤前日より海鳴潮の干満乱しをしらすして死に至る者是憐むべし[后世]	4. 去年霜月四日五日の地震を遁ん為に小船に乗居し輩< 俄の洪浪湧か如く > 5. 木津川口悉の大小数船一時に川上に押寄橋を落し< 船を掻き漂没死人夥し > 6. 尤前日より海鳴潮の干満乱しを志ら寿(しらす)して死に至る者寔憐むへし
西 面	7. 海鳴潮の干満みだれし時は早く津波の兆と知りて難をのかれ玉ふへし 8. 安政二乙卯秋建之	7. 海鳴潮の干満みだれし時は早く津浪の兆と知りて難をのかれ玉ふへし[と云爾] 8. 安政二乙卯春建之	7. 海鳴潮の干満みだれし時は早く津浪の兆と知りて難をのかれ玉ふへし[と云爾] 8. 安政二乙卯春建之	7. 海鳴潮の干満みだれし時は早く津波の兆と知りて難をのかれ玉ふへし 8. 安政二乙卯秋建之
北 面	(上部に梵語が記されているのみ)			(上部に梵語が記されているのみ)

表中のアラビア数字は著者が加えた行番号であり、( )は著者による註、[ ]は史料編集者による加筆と考えられる部分を示す。Cでは、句読点が付けられていたが、削除した。Dの< >は、碑文を直接確認できていない部分を示す。また、各碑文記録中の相違箇所を下線を引いた。

諸國地震洪流

# 南無阿彌陀佛

水陸横死大菩提

右四天王寺石碑文

高井田和尚筆

石碑孔裏

昔者五月四日、地震を道人も小舟も舟も、  
 縁の洪流漂つて、木津川迄死た、船一時、川上  
 押寄、船を落し、船を推し、漂流死、人、物、船、舟、海に  
 潮の干満、死を志し、死に、死に、死者、死に、死に、  
 海に、潮の干満、死に、死に、死者、死に、死に、  
 死に、死に、死者、死に、死に、死者、死に、死に、

図1 『地震海溢記』(慶応義塾大学三田メディアセンター所蔵)

Fig. 1. "Jisin Kaiitsuki"(The original is in the Mita Media Center of Keiogijyuku Univ.)



写真1 無縁墓群の最上段中央が安政南海地震津波の石碑. 近づいて判読は不可能である.  
 Photo 1. The Ansei Nankai tsunami memorial is at top-center, among the forgotten graves.





写真2 「及洪浪」と刻まれている。  
Photo 2. It is inscribed “及洪浪”.



写真4 「川上に押寄」と刻まれている。  
Photo 4. It is inscribed “川上に押寄”.



写真3 「四日五日の」, 「木津川口悉の」  
と刻まれている。  
Photo 3. It is inscribed “四日五日の”,  
“木津川口悉の”.



写真5 「尤前日」と刻まれている。  
Photo 5. It is inscribed “尤前日”.

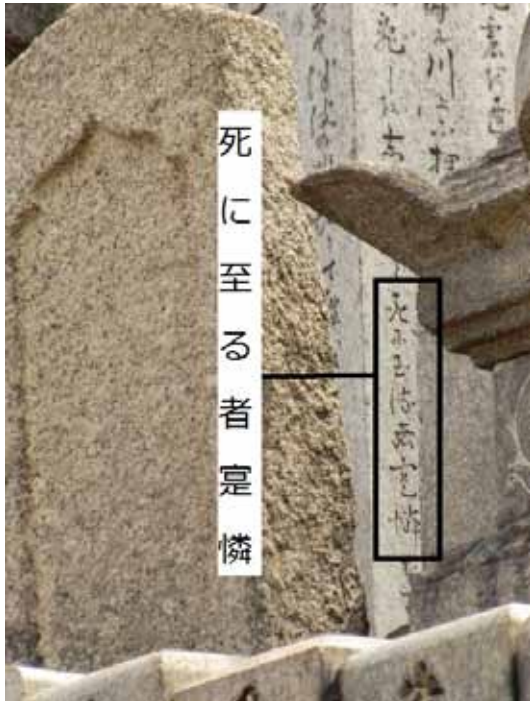


写真6 「死に至る者寔憐」と刻まれている。  
Photo 6. It is inscribed “死に至る者寔憐”.



写真7 「秋」と刻まれている。  
Photo 7. It is inscribed “秋”.